
花ひとつ

忍冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花ひとつ

【Nコード】

N8331Y

【作者名】

忍冬

【あらすじ】

初恋組のお話。非常にありきたりな。

(前書き)

イタリアの三人称は「彼女」となっています

暖かなひだまりは、いつの記憶？

あの頃、降り注ぐ光はもっと優しくかった。

鮮やかな色のスカート。

柔らかい花飾りの手触りをまだ手の平に感じられる。

それよりも、もっと美しくて優しい花を覚えている？

ほんの、10センチメートルに満たない小さな花。

細やかな花びらにふつくらと優しい花芯。

その名前は、デイジー。



「うそ……。嘘ですよ？オーストリアさん！」

子供らしい悲鳴がホールに響いた時、私はこの子に全てを話したことを後悔しました。

でもしょうがないではありませんか。

「いいですか、イタリア。私のことを嘘つき呼ばわりしても構いません。ただ、私は知っていることを言うだけです」

あの子はしゃくりあげながら、でもしっかりとこちらを見ていましたっけ。

私は自分の知る限り、彼の消息について話しました。

あの子はただ、黙って聞いていました。



「オーストリアさん、なんであんなことを言っただんですか?！」

「私だって後悔していますよ。しかし、しょうがないのです……いつかは知らなくてはなりません」

「でも……イタちゃん、あんなに悲しんで……もうずっと何も食べないで……部屋に閉じこもって……」

まるで自分のことのように、その瞳には涙が湛えられています。

「……あのままじゃ……あの子も……」

そう、この人は優しいのです。大昔から自分が傷ついてきたから、他人の痛みがわかるのです。

「なんとか………しない」と

「分かっていますよ。だから早く涙をお拭きなさい。貴女も一応、召使なのですよ?」

「でも……、はい………。そ、そうですよね………すみません」

その美しい瞳には涙は似合いませんからね。



「イタリア、入りますよ」

小さな扉に話かけても何も返って来ない。

そっとドアノブに手をかけると、鍵は掛かっていなかった。

「イタリア………!」

暗い部屋には明かりもついていない。蝋燭は燭台の上に小さく、いびつな形に凝り固まっている。

ベッドの上に頭をもたれかけた少女。

「オーストリア………さん?」

か細い声が、彼女の身体にも限界が近づいていることを告げていた。

「何をやっているのです？」

「神聖ローマ……待ってるの……」

「あの子はもういません。いくら待ったって来はしないと、あの時言ったでしょう？」

「嘘だよ……だってボク、神聖ローマと約束したもの。……帰ってくるって……言ったもの」

「何度も言っているでしょう！あの子は帰って来ないと………！」

「うそ………」

実を言えば、彼はその瞬間のことは覚えていない。

気がつくとう右手にはじんわりとした痛みがあった。目の前では左頬に手を当てたイタリアが目を見開いていた。

琥珀の色が暗いなかでもはっきりと見えた。

「このお馬鹿さん！」

「貴女が壊れてしまっとうなるというのです！」

「あの子は……あの子は、死をもってしてまで自分の運命を受け入れたのですよ！」

「あの子は貴女を愛していた………！貴女が悲しんでいる時の彼と
いったら、尋常でなかった」

「貴女が今、あの子を愛しているのなら、何故、彼が悲しむことを
するのです?!」

「ボク……。ボク………」

小さな、戸惑った声。

「お立ちなさい、イタリア」

細い腕を捕まえた彼はそのまま彼女を外へ連れ出した。

午後の空は冴々と澄んで、暖かな光でいっぱいだ。ちょうど、あ
の日のように。

彼が最後に此処を発った日のように。

ひゅっと、息を呑む音。

「待って！やだ！やだよ！オーストリアさん！ボク、外になんか出
たくない！」

「駄目です！少しは頭を冷やさない！」

泣き叫ぶイタリアの前で彼は重い扉を閉めた。



扉は無情なほどに重い。

自分の力では到底、動かないなんて分かってる。だけれど堪えられない。

悲しいのに涙はとっくの昔に涸れている。渴いた嗚咽は細すぎて、誰にも届かない。

目を閉じる。

ダメ、ダメなの。今の太陽は、光は、ボクには明るすぎる……。

風は心に突き刺さる。

「でも……………」

動くのを辞めた。身体から力を抜いて、扉の前にうずくまる。

あの時の記憶と、たった今の記憶が混じり合う。

それでも、ボクは……………

彼がもし、それを望むなら、強くあらなくてはいけない。

そっと目を開く。

「え……………」

自分と扉の間、うづくまる彼女に優しくキスをするように。
そう、そんな具合にその花は咲いていた。

「デイジー……………」

自分の花。彼の花。

ねえ、神聖ローマ。ボクは強くなるよ。

キミには敵わないかもしれないけれど、だけれど、その分優しくなるよ。

目の前に小さな花。背中には暖かな日だまり。

風が優しく頬を撫でた。浅緑の風が香った。



それからボクは、ずっとずっと長く生きました。

いろんなことがあったけど………

だけれどボクの心の隅にはずっと君がいる。

ねえ、今日、不思議な人に会ったよ。

ドイツに会ったよ。

君とキスしたあの日みたいに綺麗な瞳をした人だよ。

End………？

(後書き)

これからも細く長く更新したい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8331y/>

花ひとつ

2011年11月24日21時52分発行